

報告

モンゴル・ノモンハン戦跡旅行記

石原明德（防衛研究所／立命館大学）

2025年6月下旬、立命館大政策科学研究科のモンゴル・ノモンハン戦跡現地調査の一員として、私は四半世紀ぶりにモンゴルの地を踏んでいた。

今回の現地調査の目的は、大戦略／地政学の視点からノモンハン事件の再評価を目指す共著執筆のためである。

学生時代に蒙古帝国史を学んでいたが、念願かない初めてモンゴルを訪れることができたのは1999年のことだった。当時、私は青森県の片田舎で国の会計機関職員として勤務していたが、社会人としての仕事にもやっと慣れ、忙しい勤務の中でもなんとか1週間の休みを確保し、オフロード・バイクで広大な草原を走る、というツアーに参加することができた。広大な草原と気ままに流れる川の光景は、学生時代から憧れていた蒙古高原のイメージどおりだった。だが、意外にも砂丘や岩山など相応の高低差のある地形がところどころにあり、学生時代に訪れていた中央アジア・ウズベキスタンの平原ともまた異なる光景だった。草原に佇む突厥時代の石人像や丘の頂上に築かれたオボー、草原の巣穴から顔を出すタルバガンの光景が懐かしく思い出される。20世紀末のモンゴルはまだ交通量も少なく、ウランバートルの都市部では韓国製の中古車が目立ち、ひとたびウランバートルを離れると行き交う車は極端に少なく、未舗装道路を走る旧ソ連製GAZトラックが目立つ程度だった。

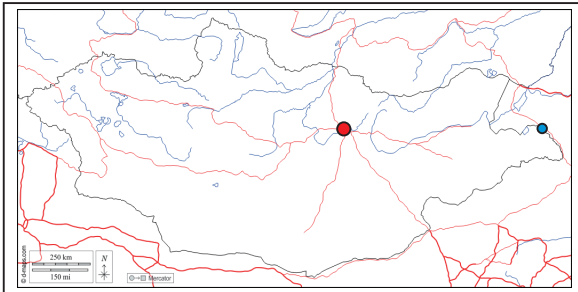
2021年に開港したチンギス・ハーン国際空港はウランバートル市街から約50kmほどの遠方にあり、ウランバートルまで立派な高速道路が通じていた。ウランバートルへ向かう車窓からは草原の中で群れを成す羊の遊牧が見られるなど、空港近傍はかつてのモンゴルと変わらない光景が広がっていた。

四半世紀ぶりに訪れたウランバートルは大都会に大幅に進化していた。事前に同じゼミのモンゴル人留学生に聞いていたこともあり予想はしていたものの、ウランバートル市街に近づくと渋滞が酷く、ウランバートル市内の乗用車の半数以上がプリウス・アクアといった日本製のハイブリッド車のようなだった。



郊外からウランバートル市内へと入る。
高層マンションの建設ラッシュである。
2025年6月筆者撮影

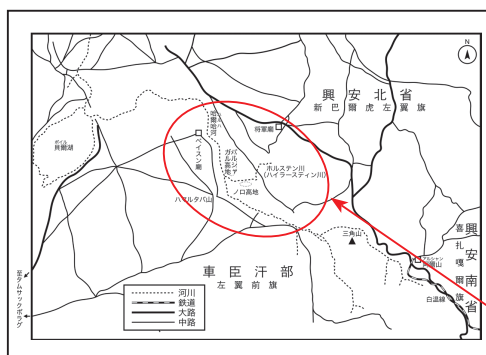
蒙中東部国境にあたるノモンハン戦跡は、ウランバートルから往復2000kmの距離がある。私たちは日程の関係もあり、現地の共同研究者ブヤン・ツォグト博士が用意したランド・クルーザーで2泊3日の強行軍で現地を訪れた。公共交通機関を使用した場合、このような日程での往復は不可能である。



現在のモンゴル国地図
黒線：国境
青線：河川・湖沼
赤線：主要道路
赤点：首都ウランバートル
青点：ノモンハン主戦場
現在でも首都ウランバートルから
東部国境のノモンハンに至る主要
道路は開通していない。



ランド・クルーザーにモンゴル人ドライバー
1名、日本側研究者2名（宮脇教授と私）、
モンゴル側研究者1名（ブヤン・ツォグト博
士）と食料・キャンプ用品一式を積み込んだ。
2025年6月筆者撮影

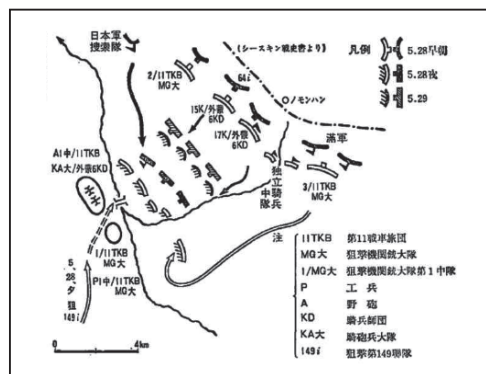


1942年当時のソ連・モンゴル・満州国境概要図

防衛研究所所蔵『陸地測量部発行満州50万分の一地図 貝爾湖』をもとに一部修正

ノモンハン主戦場

1939年5月-9月に戦われたノモンハン事件はモンゴルではハルハ河戦争と呼ばれている。日ソ間の大規模国境紛争であるノモンハン戦において、第23師団を中心とする日本軍は機械化部隊を主軸とするソ連軍に対し苦闘を強いられ、最終的には大損害を被って撤退を余儀なくされた。この事件は、日本陸軍の戦車運用思想や補給観念の欠如を浮き彫りにし、後の対米戦の予兆ともなった、戦史上名高い戦いである。



1939年5月末（第一次ノモンハン戦）の戦況図

防衛研修所編『戦史叢書 関東軍1-対ソ戦備・ノモンハン事件』465頁。

バルシャガル高地付近には、今なお多数のソ連軍車両の残骸が見られる。

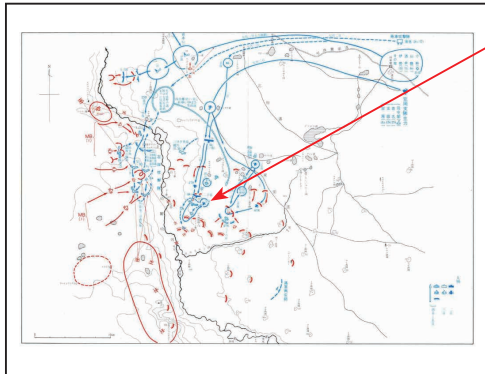
BA-10装甲車

2025年6月筆者撮影

なお、付近には日本軍のものと思われる鉄帽等も点在している。



ノモンハン戦時、1939年7月に日本陸軍はハルハ河を渡河しモンゴル領内に侵攻している。この侵攻は約3日間という短時間で失敗したが、内陸河川としては大河と言えるハルハ河渡河に必要な渡河資材が日本側に不足していたことも失敗の原因とされている。

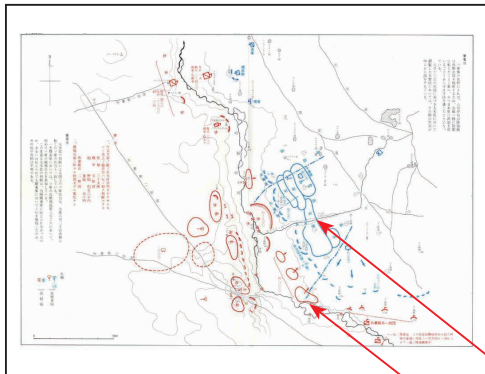


激戦地バルシヤガル高地

1939年7月（第二次ノモンハン戦：日本軍攻勢）の戦況図

防衛研修所編『戦史叢書 関東軍1-対ソ戦備・ノモンハン事件』付図第三をもとに加筆。

90年近い時を経ても、6月下旬のハルハ河は今なお十分な流速・流量を誇っていた。ハルハ河右岸は基本的には軟弱な砂地であり、渡河資材無しで部隊単位での渡河は不可能だったことが理解できた。



1939年8月初旬（第二次ノモンハン戦：日本軍攻勢頓挫後）の戦況図

防衛研修所編『戦史叢書 関東軍1-対ソ戦備・ノモンハン事件』付図第五をもとに加筆。

ホルステン河

現在のハルハ・ゴル村橋梁の位置



ハルハ・ゴル村橋梁上から見たハルハ河

2025年6月筆者撮影

興安嶺を水源とするハルハ河は、現在も流量・流速ともに十分にあり、国内河川に例えると信濃川に似た大河だと言える。右岸の土壌は砂地で極めて軟弱である。



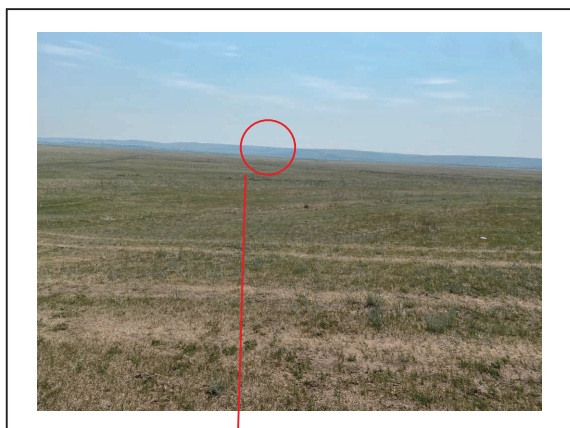
現在のホルステン河

2025年6月筆者撮影

川の中ほどに、行き倒れた蒙古馬が見える。

また、激戦地の「川又」エリア付近で中国（旧満州）国境から流れ込む支流ホルステン河を渡河したが、こちらの流量は当時と比べて減少しているように思えた。

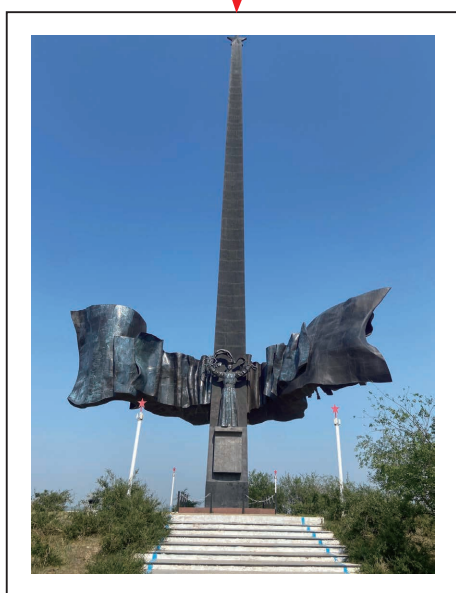
現地の地勢上、ハルハ河左岸は「山」や「丘」というよりも広大な台地となっており、戦場となったハルハ河流域低地からの比高差は50－150m程度もあった。すなわち、ソ連軍司令部が布陣するハルハ河左岸台地上からは、日ソ両軍の戦闘が行われたハルハ河流域低地への弾着観測は容易であったことが見て取れた。



激戦地バルシャガル高地西方からハ
ルハ河左岸を望む

2025年6月筆者撮影

画面左、地平線上に頭を覗かせてい
る塔は、ソ連軍の戦勝記念碑であり、
当時のソ連軍司令部の位置にあたる。



当時のソ連軍司令部の位置（ハマル・タヴァ
峠）に建設されたソ連軍の戦勝記念碑

2025年6月筆者撮影



激戦地、バルシャガル高地付近に残
るソ連空軍機、IL-2 襲撃機の残骸

2025年6月筆者撮影

エンジン下面・操縦席を覆う鋼鉄製
の装甲部材がよく残っている。

同機はノモンハン戦時には未就役
だったことから、1945年の対日戦時
における損失機体だと推定される。



ソ連軍司令部南方台地上から戦域を望む。

2025年6月筆者撮影

低地との比高は概ね150 m程度である。

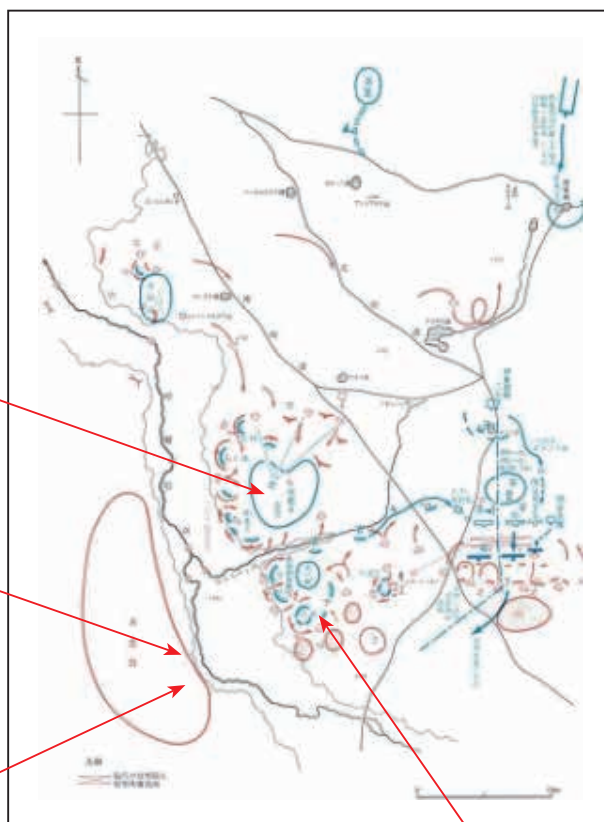
1939年8月下旬（第二次ノモンハン戦：ソ連軍攻勢）の戦況図

防衛研修所編『戦史叢書 関東軍1－対ソ戦備・ノモンハン事件』付図第六その二をもとに加筆。

激戦地バルシャガル高地

ソ連軍司令部（ハマル・ダヴァ峠）

ソ連軍司令部南方台地



激戦地ノロ高地



ソ連軍8月攻勢で、日本軍主力が撃破された
激戦地バルシャガル高地付近に直立したソ連
空軍PO－2観測機
2025年6月筆者撮影

現地調査の結果、ノモンハンの戦場の広大さと、その地勢が戦術的に日本側にとって不利な条件であったことを、改めて理解することができた。日程的に現地調査に充てられた時間は丸一日と短かったが、非常に有益だったと言える。



モンゴル・ヘンティー県のロー
ドサイドのキャンプ場
キャンプサイトのほか、ゲル、
バンガロー、食堂棟がある。
2025年6月筆者撮影

ウランバートルからノモンハンへの行程では、初日はロード・サイドのゲル・キャンプに宿泊し、2・3日目はノモンハン戦域北方の蒙中国境にあたるボイル湖畔のゲル・キャンプに宿泊した。



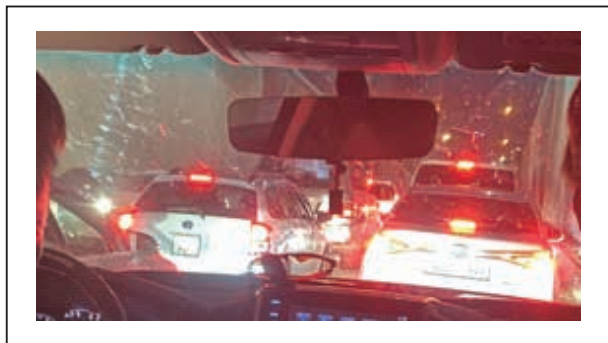
蒙中国境のボイル湖畔のキャンプ場

キャンプサイトのほか、ゲル、ドーム棟、食堂棟がある。

2025年6月筆者撮影

ドライバーのアンゲル氏は、奇しくも四半世紀前にお世話になった旅行社の元社員であった。6月末のモンゴルはこの時期としては異常に高温であり日中最高気温が42度にも達する中、アンゲル氏の熟練した運転によりなんとか計画どおりの行程で往復することができた。

ウランバートル到着は23時頃となったがこの時間でも渋滞が酷く、四半世紀前のように、外国からの旅行者が気軽にバイクで運転できるような交通環境ではなかった。

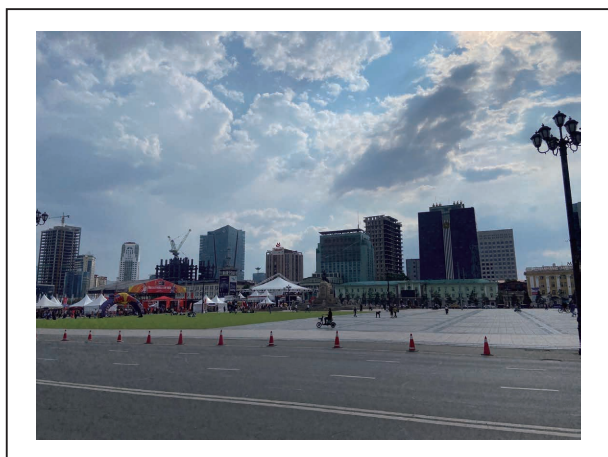


ウランバートル市内の渋滞は極めて深刻である。

23時過ぎの光景

2025年6月筆者撮影

四半世紀前にも宿泊したフラワーホテルは未だ健在であり今回も帰国前に利用したが、経営権は日系から現地資本へと変わったとのことだった。特に、モンゴルの人口の1／3が集まるウランバートル市は四半世紀前からあらゆる意味で発展しており、これほどの変化に正直驚くとともに、新興国の熱気とエネルギーを感じずにはいられなかった。



ウランバートル市内中心部のス
フバートル広場

2025年6月筆者撮影

一方で、ウランバートル市を一步離れると、モンゴルには広大な草原と遊牧の光景が未だに広がっている。このギャップもまた現在のモンゴルの魅力だと言えるだろう。

四半世紀の時の流れを感じずにはいられなかったが、私にとっては極めて印象的な旅であったと言える。



ウランバートル市近郊

2025年6月筆者撮影